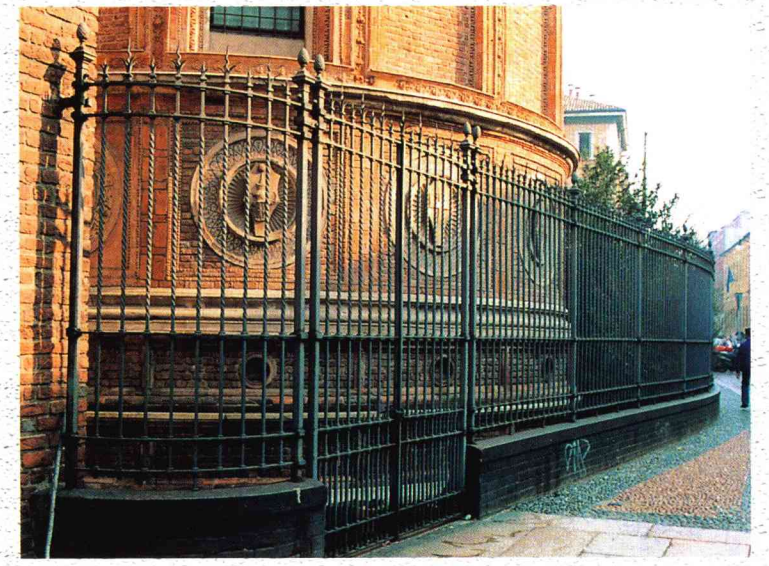
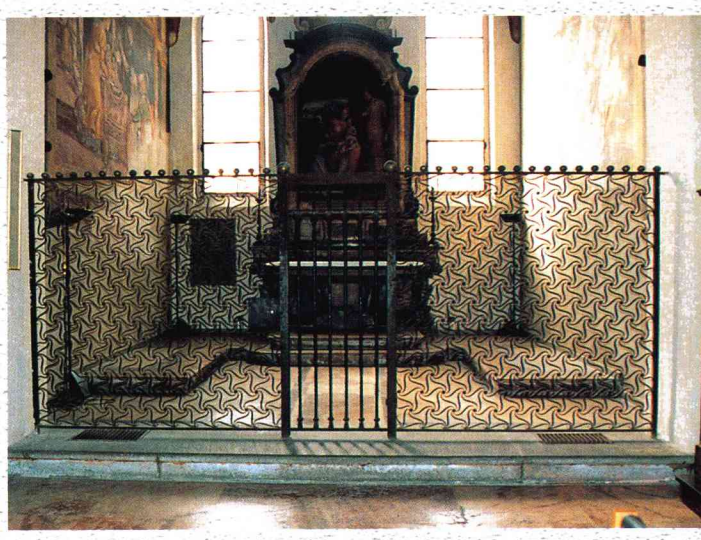
Steel Landscape 鉄の点景



▲▼ルアンにある「鉄の博物館」に所蔵されている鉄の門。千年近くの時を経た今でも、当時の流麗な姿をとどめている。



門

住居の「顔」である門。門地・門閥などの言葉が存在するように、その風貌は家屋全体、果てはそこに住む人々の印象をも左右する。人々の暮らしと切り離せない存在である門と鉄の間には、これまでいったいいかなる歴史が存在したのであろうか。

門の哲学

西欧と日本の都市の大きな違いの一つは城壁の存在である。都市機能と防衛機能とを一体化させた西欧都市において、門は不可欠の存在であった。城壁が必要ならば、なんらかの出入り口、門が必要となるからである。そこで城壁の間には市門と呼ばれる門が必ず備え付けられた。市門には、防衛の機能を損なわないために、十分な強度が必要とされた。遺跡の中でかつて門が備えられていた場所などをみると木や石を上手く組み合わせ、城壁に負けない強度を生み出す工夫がなされていたことが分かる。

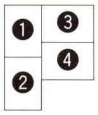
防衛を主として発達した門だが、時代の変化とともにその姿を変化させてきた。ただ柱を組み合わせた門は戦時には重要な機能を果たすが、見る者に無骨な印象を与えずにはいられない。そこで、文明が進むにつれ、人々が住む生活の場である都市では、美観上の配慮が求められるようになった。これが門に徐々に装飾が施され、景観の一部として都市に取り込まれていくようになった理由である。この防衛・装飾機能という門の持つ二つの特性は、今日の門にまで脈々と流れ続けている(とはいっても今日の門にとって重要視されるのは、防衛というよりも防犯の側面であるが)。

鉄の門

二つの思想を体現しなければならない存在である門にとって、素材の選択は重要であった。人々の生活を守ると同時に、造形的な美までをもかね備えなければならないからである。それまで使われていた木や石などに比べてはるかに強度と加工性に優れた鉄が、素材となっていくのは半ば必然的なことでもあった

といえよう。鉄の門が登場したのは、10世紀以前といわれる。現存する最古のものと思しき門は、11～12世紀頃に作られた鉄の門である。その門は現在「鉄の博物館」（フランス・ルアン）にほぼ完全な状態で所蔵されている。

また強度に優れた鉄は、それ以前の素材よりもシャープで機能美に優れた造形を可能にした。たとえば格子部分では、ピアスバーと呼ばれる穴を持つ棒材に、上からバーを通し、上下でねじりを加える方式が採用された。この構造では、片端を切断しただけではバーを抜くことは難しい。シンプルで美的な形状ではあるが、外部からの破壊に対する防御のために生まれたというのが実情である。



いろいろな門

❶ロマネスク：ロマネスク様式は、10世紀の蛮族の進入によって荒廃した街並を復興するために生まれたとされる。装飾に関しては、機能重視のため、質朴なものが多い。

❷アール・ヌーボー：植物の形態などをモチーフとしたうねるような曲線で装飾されたデザインをアールヌーボーと呼ぶ。19世紀末に流行したジャポニズムの影響もあるため、日本人にも馴染みやすいデザインである。

❸アール・デコ：1925年のパリ万国装飾美術博覧会にその名を由来するアール・デコ様式。直線と弧、階段状の繰形などを使用するこのデザイン様式では、鉄の門にも幾何学的なデザインが施されることが多かった。

❹コロニアル：湿潤な南米植民地向けにデザインされた門。腐食を防ぐためのS字型の文様が多くなされたこと、技術者の不足を補うために構造も極力簡略化していることなどが特徴である。

機能美の世界と技術革新

このように機能と美を実現した鉄の門は、以後、ほぼ忠実に、その時代ごとの建築様式にあわせて姿を変えていった。機能を重視するロマネスク様式にはシンプルな構造で作られたものが、宗教色の強いゴシック様式が流行した時代には装飾がふんだんに使われた。またルネサンス時代にはゴシックとは逆行したデザインが主流となり、バロック様式下では左右不対称なつくりがもてはやされた。それ以後も、ロココ、アールヌーボーなど、時代の変化に歩調を合わせて、門はその機能美の世界をより深めていく。

ただこの変化は、あくまでも装飾にかかわる部分での変化にとどまり、製作にかかわる根本的な技術革新を生むことはなかった。門の本質的な変化が生まれたのは、溶接技術、防錆処理の発達による部分が大きい。

従来、門の接合は、刀鍛冶における着鋼技術に似た「鍛接」と呼ばれる形式で行われていたため、デザインできる形状にも限界があった。ところが溶接技術の発達は、形状に関してさまざまな試みを可能としたのである。加えて門扉の耐食性の問題も、防錆処理技術の発達により解決された。現在の門扉やフェンスでも見られる波状のS字型装飾は、元来、点接触で限りなく腐食を防ごうとするアイディアから生まれた造形であった。接触部分から腐食が始まるという鉄の特性を考え、接点を限りなく少なくしようとする職人の知恵から生まれたデザインであったが、現在の防錆処理技術を持ってすれば、このような形状にとらわれる必要性はなくなり、より多彩なデザインも可能となっている。このような技術的な進歩の助けもあり、鉄の門はさまざまな意匠を凝らしつつ、未だ西欧社会において、現役で活躍している。

鉄の門と日本

西欧では順調に発達を遂げた鉄の門だが、日本の場合はどうであったろうか。安土城や金沢城など、木製の門扉に鉄板を貼り付けた黒金門と呼ばれる形式のものが取り付けられた例もあるが、それ以外には、鉄が使用された門として、格段目に付くものはない。欧化が進められた明治以降も、迎賓館などの典型的な洋風建築物をのぞいて、普及した様子も特には見られない。気候風土や文化の違いなど、さまざまな要因はあったと思われるが、日本において鉄の門がなかなか普及しなかったのは歴史的な事実と言っていいだろう。

しかし、近年のレトロ建築ブームなどもあって、古のヨーロッパ調の門を設計する施設も誕生し、製作を行う技術者も増加しているようである。ウサギ小屋などと住宅事情の悪さを揶揄されることも多いこの日本で、「住居の顔」である門構えにこだわる姿勢が、今、生まれ始めたのかもしれない。我が国にやっと根付きはじめた鉄の門が生んだ、この新しい姿勢から、今後、新しい鉄の文化が生まれることに大いに期待したいものである。

●参考文献
「物語　ものの建築史　門のはなし」鹿島出版会　佐藤　理
「ビジュアル版 西洋建築史 デザインとスタイル」　丸善㈱　長尾重武／星和彦

［写真・取材協力：（株）ジェネラルハードウェア、（資）堀商店］